

児童生徒の個別的な人権課題に対する理解を促す授業モデルの研究実践事例

1. 基本情報

○市町村名

福津市

○学校名

福津市立福間小学校

○学校の概要

(令和2年2月1日現在)

35学級(うち特別支援学級7学級) 全児童数:1019人

○学校のURL

<http://www.city-fukutsu.ed.jp/fukuma-e/>

○調査研究のテーマ

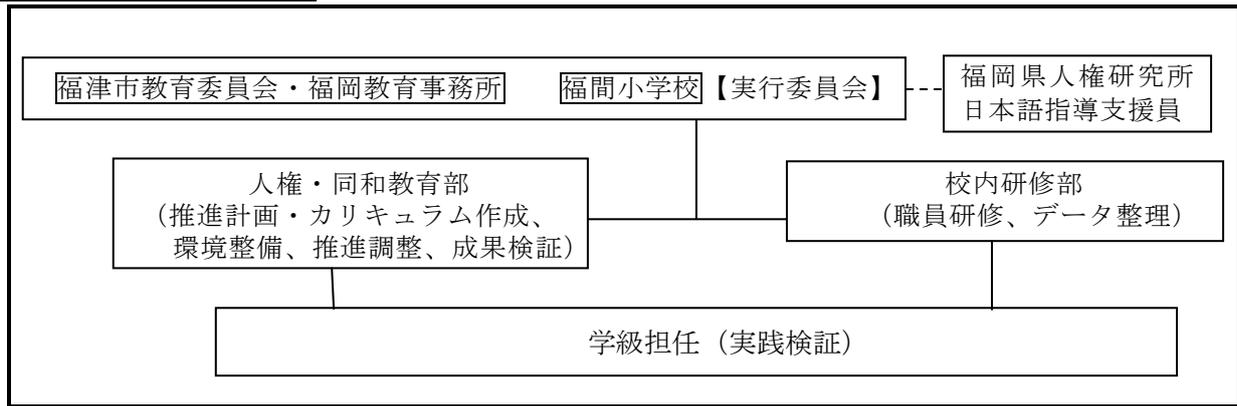
外国にルーツをもつ児童を取り巻く人権課題の解決に向けた共生できる児童を育てるカリキュラム開発に係る研究

2. 調査研究のテーマを設定した背景

平成28年5月1日に実施された、文部科学省調査『日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査(平成28年度)』によると、前回の調査(平成26年度)では日本語指導が必要な子どもの数は「約37,000人」だったものが、今回は「43,947人」と増えており、10年前の平成16年度調査と比較すると、約1.6倍の増加となっている。この内、外国籍の子どもは34,335人で、前回調査29,198人と比較すると、5,000人以上増加している。また、日本国籍ではあるものの日本語を母語としない子どもや国際結婚家庭の子どもなど、日本語指導が必要な子どもが9,612人おり、前回調査比21.7%の増加となっている。

福津市でもここ数年の宅地開発による人口流入に伴い、様々な国にルーツをもつ方が増加している。本校でも様々な国にルーツをもつ子どもや帰国子女が入学・転入してきており、「日本語で日常会話が十分にできない」「日常会話ができて、学年相当の学習言語能力が不足し、学習活動への取組に支障が生じている」「文化の違いに意見や気持ちがすれ違う」ことによる「困り感」を示している場面が多々見られる。これらの子どもの「困り感」を解消するとともに、今後国際社会を生きていく人材として、様々な国にルーツをもつ方が日本で暮らす状況を理解し、差別や偏見のない社会の実現について考え、行動できるようにするため、本テーマを設定した。

3. 調査研究の推進体制



4. 調査研究の内容等

○現状の分析と課題

福間小学校校区は現在人口が急増しており、校区内で様々な国にルーツをもつ方を見かけることも多くなっている。本校でも、様々な国にルーツをもつ子どもが多数在籍しており、現在4名の児童が日本語指導を受けている。日常会話や学習言語、日本文化や風習等を毎週の指導で学び、児童の学校生活や日常生活での不安感の解消に役立っている。

また、本年度、人権問題に対する授業づくりについての研究に取り組んだことは、児童が外国にルーツをもつ方の環境や文化の違いについて理解することに有効であった。しかし、文化の違いによるすれ違いやトラブルなど、依然として課題もあり、違いを認め、互いの人権を大切にしながら共に生きていこうとする態度を身に付けさせる研究や実践が必要であると考えます。

○調査研究の内容

- ①様々な国にルーツをもつ方に対する子どもの意識、日本語指導を必要とする子どもの実態、教職員の人権意識を調査し、本校における課題を明確にする。
- ②効果的な指導法を研究・実践し、それらを位置付けたカリキュラムを作成する。
- ③実践を支える土台となる教職員の人権感覚や人権意識を高める研修を実施する。

【研究仮説】

人権教育推進の土台となる教職員の人権感覚や人権意識を高め、効果的な指導法やカリキュラムを開発・実践することにより、子どもの人権感覚が高まり、違いを認め、互いの人権を大切にしながら共に生きていこうとする態度が身に付くと考える。

○実施方法

①児童の人権意識の実態調査

様々な国にルーツをもつ方々に対する子どもの意識、日本語指導を必要とする子どもの実態、教職員の人権意識を調査し、本校における課題を明確にする。

- ・児童人権アンケートの2回実施（5月・12月）

- ・ Q Uアンケート及び研修(講師招聘) の2回実施(8月・1月)
「Q Uアンケートの分析とリフレクションシートの活用」についての研修を行い、学級経営の見直しを行う。
- ②授業づくりについての研修会を設け、効果的な指導法を研究・実践する。また、実践をもとに、昨年度作成の「多文化共生に関わるカリキュラム」の修正を行う。
 - ・ 指導案審議①②：福岡教育事務所豊田指導主事のご指導のもと、各学年の指導案審議を夏休みに2回行った。
 - ・ 研究授業及び協議会：全職員で第1学年の研究授業、協議会を行った。
指導助言：福岡県教育庁福岡教育事務所人権・同和教育室 豊田指導主事
 - ・ 各学年部授業実践交流：全職員での研究授業、協議会を受け、各学年で授業実践を行った。学年ごとに、授業参観と授業後の協議会、次のクラスの実践に向けての改善を協議した。
- ③実践を支える土台となる教職員の人権感覚や人権意識を高めるため、講師や当事者の話を聴く研修を実施する。

夏季研修1

「外国にルーツを持つ児童を取り巻く人権課題の解決に向けた、共生できる児童を育てるために」
日本語サポートセンター 池田 尚登 先生

- ・ 日本語指導を必要とする児童の実態と支援の在り方について
- ・ 多文化共生の心をはぐくむ支援について

夏季研修2

「人権教育推進上のポイント～問題事象に対する短・中・長期的な取組」
福岡県人権研究所 谷口 研二 先生

- ・ 校内研修：夏季研修を受けての学びの共有

PTA 人権講演会

「お隣さんは外国人」 荻田国際交流親善チーム

- ・ 地域に「外国人」として暮らしている人とのかかわりについて

○検証・評価・普及

①アンケートをまとめ、子どもの意識の変容を検証

○実践授業事前・事後アンケートの検証

例：2年生「広い世界のたくさんの人たちと」（出会いの活動：中国の方に聞いてみよう）【せかいの国について、知りたいと思いますか？】

	とても思う・思う	どんなことを知りたいか。	あまり思わない・思わない	
事前	71%	言葉を知りたい・アメリカのことを知りたい・食べ物	29%	
事後	94%	言葉・食べ物・生き物・洋服・国旗・何でも知りたい・いろいろ知って友だちになりたい・	6%	日本のことを知りたい

【世界の国の人とも、友だちになってみたいですか】

	とても思う・思う	わけ	あまり思わない・思わない	わけ
事前	78%	・友だちが増える ・言葉を知りたい・言葉を教えてもらえる	22%	言葉が分からない
事後	93%	・せかいの国の人と仲良くしたい ・友だちになって遊びたい	7%	言葉が分からない

事前と事後のアンケートの変化を見ると、興味関心の割合が高まっただけでなく、世界のほかの国のことを知りたいわけや友だちになりたいわけなどの内容も増え、興味関心の幅も広がったと言える。出会いの活動においては、身近な A さんの保護者や通訳の方から国の違いについて話していただいたり、子どもにとって興味の高い遊びを一緒に体験したりすることで、「外国の方ともっと関わりたい」「もっといろいろなことを知りたい」という興味関心の幅が広がった。

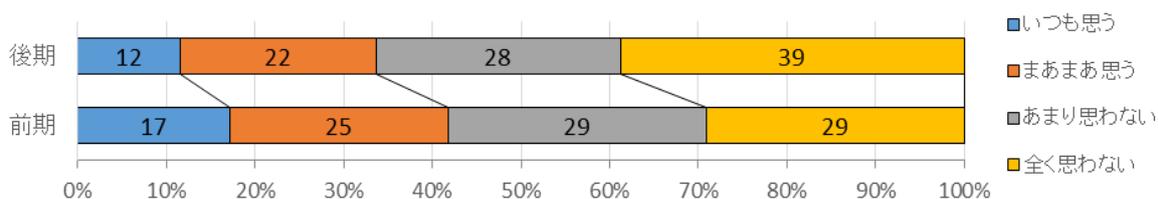
○児童人権意識アンケートの実施

5月と12月の2回のアンケートを行った。アンケートにおいては、子どもたちの人権意識を技能的側面の観点の以下の項目で検証することとした。

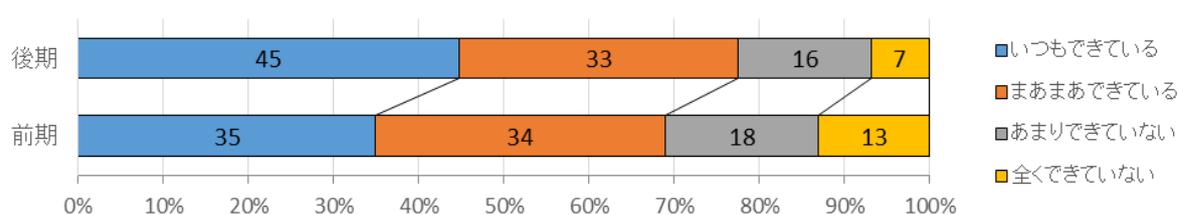
- 1 人間の尊厳の平等性を踏まえ、互いの相違を認め受容できるための諸技能
- 2 他者の痛みや感情を受容できるための想像力や感受性
- 3 能動的な傾聴、適切な自己表現を可能とするコミュニケーション技能
- 4 他の人との対応で豊かな関係を築くことのできる社会的技能
- 5 人間関係のゆがみ、ステレオタイプ、偏見、差別を見きわめる技能
- 6 対立的問題を非暴力で、双方にとってプラスとなるように解決する技能
- 7 複数の情報源から情報を収集・吟味・分析し公平で均衡のとれた結論に到達する技能

前期と後期のアンケート比較

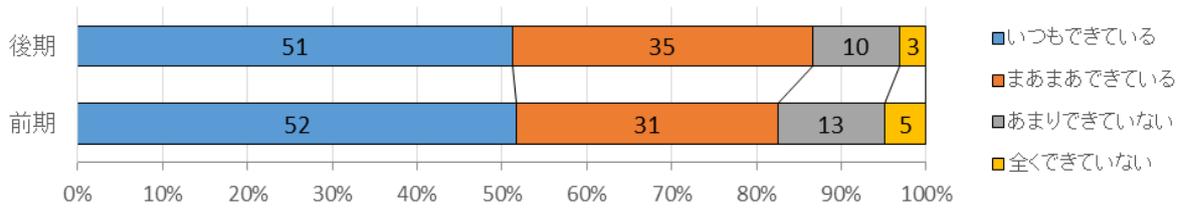
2 友だちが自分とちがうことを言ったりしたら「へんだな」「おかしい」と思う



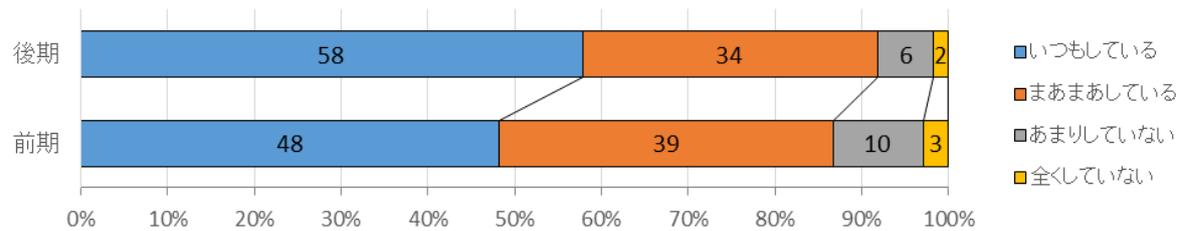
13 自分の良さを見つけることができる



14 友だちのよさを見つけることができる



15 自分とちがう意見もちゃんと聞いて話し合っている



観点の項目①と⑥などの、違う意見を受け入れるという多様性の尊重・共生につながる項目においては、少しではあるが変容が見られた。2年の研究において、人権カリキュラムの作成や教職員の人権意識を高める研修を通し、多様性を意識したクラスづくり授業づくりが学校全体を通して進められた成果ではないかと考える。

②授業研究

研究授業及び協議会

- ・第1学年道徳科「ほかの国の友だち」の授業研修会及び協議会を全職員で行った。道徳科の目標における人権学習のねらいを明確にすることで、学習展開や発問の工夫について学び合うことができた。また、よりその価値に迫るために「出会いの活動」の重要性を確認し、他の学年の授業づくりに生かすことができた。

指導案審議及び各学年部授業実践交流

- ・2度指導案審議を行うことで、ねらいとすることや授業における人権教育の視点を明確に持つことができた。また、各学年の中で授業公開し協議することで次の授業の練り直しをすることができた。
- ・授業を道徳科の学習に絞り、授業の中や事前事後に「出会いの活動」を仕組みことを共通理解し、授業づくりをすることができた。
- ・研修部が、「算数」と「人権」の部会に分かれ、人権学習においては必ず同学年で参観することとし、学年みんなで共通理解し全クラスで授業実践することができた。

各学年授業実践

学年	道徳科における内容 および人権学習のねらい	関連した出会いの活動
第1 学年	<p>ほかの国の友だち「ぼくとシャオミン」 目標：他国の人々に親しみを持ち、自分たちと異なる文化のよさに気付いて積極的に関わろうとする心情を育てる。</p> <p>人権学習のねらい 【技能的側面】 他の人の立場にたって、その人の考えや気持ちなどが分かるような想像力や共感的に理解する力を育てる。</p>	<p>「外国の遊びにふれてみよう」 体育：事前の学習 外国の遊びの体験 【技能的側面】 遊びの体験をもとに考えたことや感想を表現し、伝え合い、分かり合うためのコミュニケーション能力を育むことができるようにする。 【価値的・態度的側面】 世界のいろいろな遊び方を知り、外国への関心を持つことができる。(多様性の尊重・共生)</p>
第2 学年	<p>「広い世界のたくさんの人たちと」 目標：世界のいろいろな国の人々や文化に親しもうとする心情を育てる。</p> <p>人権学習のねらい 【価値的・態度的側面】 人々の文化には多様性があることを知り、お互いを認めながら共に生きようとする心情を育てる。</p>	<p>「外国の方に聞いてみよう」 学級活動：事前の学習 中国出身の本校保護者及び通訳の方のお話と遊び体験 【技能的側面】 日本に住む外国の方との交流を通して、外国の方から見た日本の文化の違いについて話を聴き、外国の方の感じ方や考えについて共感的に理解することができる。 【価値的・態度的側面】 他者に興味関心を持ち、よりよい関わりをしていこうとすることができる。</p>
第3 学年	<p>他の国の人々と心をつなぐ「三つの国」 目標：他の国の人々の文化に親しみ、興味関心を持つようとする態度を育てる。</p> <p>人権学習のねらい 【価値的・態度的側面】 バングラデシュをはじめ、さまざまな生活の在り方について、自国の文化を含めて尊重し合う心を持つことができる。</p>	<p>1 バングラデシュの遊びをしよう。 学級活動：事前の学習 【価値的・態度的側面】 バングラデシュの遊びを通して、多様性があることを理解することができる。 2 バングラデシュに行ったことがある先生の話聴く。 (本時学習展開において) 【価値的・態度的側面】 バングラデシュの文化に触れたGTの話聴き、生活や文化の多様性を理解することができる。</p>

<p>第4 学年</p>	<p>「世界の小学生」 目標：他の国々の人々や文化に気付き、郷土や自国の文化と他国の文化の共通点や相違点などに目を向けて、それぞれのよさを感じとることができる。 人権学習のねらい 【価値的・態度的側面】 世界の人々の文化、生き方、価値などには多様性があることを知り、関心を持ち、肯定的に受け止めることができる。</p>	<p>「ラーニ先生に聞いてみよう」 (本時学習導入において) フィリピン出身のALTに小学生の頃の生活について話を聴く 【価値的・態度的側面】 フィリピンの学校の様子を知り、生活や文化の多様性を理解することができる。</p>
<p>第5 学年</p>	<p>「同じ空の下で」 目標：他国の人々や異文化の中に、自分と共有される多くの感性や思いがあることに気付き、それを大切にしながら国際親善に努めようとする心情を育てる。 人権学習のねらい 【価値的・態度的側面】 人々の文化には多様性があることを知り、お互いの違いを認め合いながら共に生きようとする心を育てる。</p>	<p>「ユニセフの活動をしている方の話を聴こう」 (本時学習終末において) 【技能的側面】 他の人の立場に立って、その人に必要なことや人の気持ちを考えることの大切さを理解することができる。</p>
<p>第6 学年</p>	<p>「ペルーは泣いている」 目標：他国の人々や文化について理解し、日本人としての自覚をもって国際親善に努めようとする心情を育てる。 人権学習のねらい 【価値的・態度的側面】 同じ人間として、他国の人々を大切にしていこうとする態度を育てる。</p>	<p>「身近な外国の方とのかかわり」 (本時学習における、導入・まとめにおいて) 導入：「自分のクラスに外国の子が転入してきたら」 終末：外国語指導教員やALTより外国の方と仲良くなるコツについて話を聴く。 【技能的側面】 外国の方と豊かな関係を築くには、相手のことを知ろう、関わりたいという気持ちや、知ることの大切さに気付くことができる。</p>

③講師招聘による校内研修会：内容を絞った研修をすることができた。研修後の職員の感想をまとめ提案し、学び合うことができた。職員からは、「自分自身が人権感覚を磨く」「気付きの幅を広げる」という感想があり、2学期からの学級経営で活かすことができた。

④講師招聘による講話

様々な立場の方達から、「外国人が日本で暮らすこと」について話を聞くことができた。保護者の「同じクラスに外国人の保護者がいるので、機会を見つけて自分から話しかけたい」という感想があり、積極的に関わろうとする意欲をもつことができた。

⑤Q-Uの実施と講師の指導助言

担任自身が講師よりQ-Uの結果をご指導いただき、具体的な方策を考え、児童に返すことができた。

⑥課題及び今後の方向性

○どの学年でも「出会いの活動」によって、文化の良さに気付かせることができた。

●本校の課題やQ-Uの結果から、外国人に対しての「多様性の理解と尊重」は深まったが、子ども一人一人の心にどう響くか今後の課題である。

●これまでの各学年の授業実践をまとめ、修正し、道徳科だけではなく他教科の年間カリキュラムに位置付ける。